

キハダ インド洋

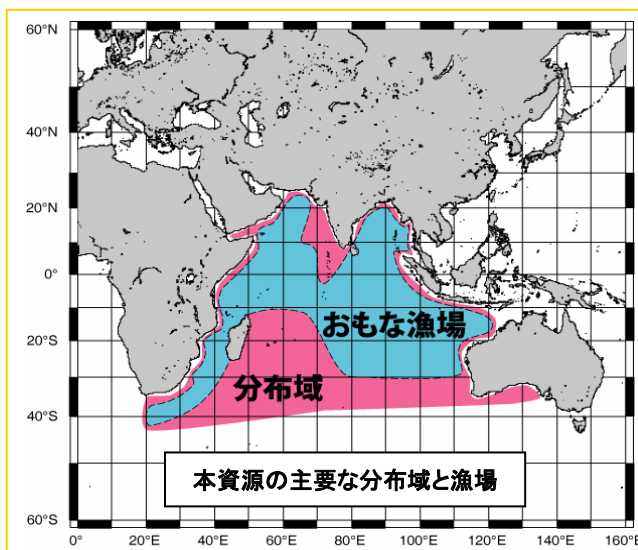
Yellowfin Tuna, *Thunnus albacares*

管理・関係機関

インド洋まぐろ類委員会 (IOTC)

最近一年間の動き

2003～2004 年にかけて、西インド洋熱帯域でまき網船（主に素群れ操業）とはえ縄船による大量漁獲が記録されたため、2003 年には約 46 万トン、2004 年には約 51 万トンと 2 年続けて過去最大の漁獲量を記録した。この大量漁獲が資源評価結果にどのように影響するかは現時点では不明だが、2004 年以降のデータは、2005 年 7 月の IOTC 第 7 回熱帯まぐろ作業部会で行われたキハダ資源評価には含まれていないため、2005 年に起こったアラビア海での台湾のはえ縄船による大量漁獲の兆候と合わせ、注意深くモニターしていく必要がある。

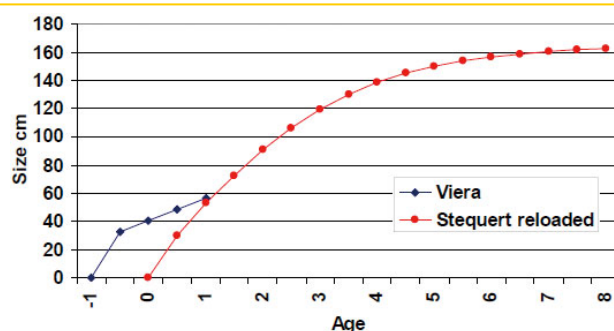


生物学的特性

- 寿命: 7～10 歳
- 成熟開始年齢: 3 歳
- 産卵期・産卵場: 表面水温 24℃以上の海域で行われ、赤道域では主に 12～1 月、主な産卵海域は東経 50～70 度
- 索餌場: 分布域に等しい
- 食性: 魚類・甲殻類・頭足類
- 捕食者: まぐろ・かじき類、さめ類、海産哺乳類

利用・用途

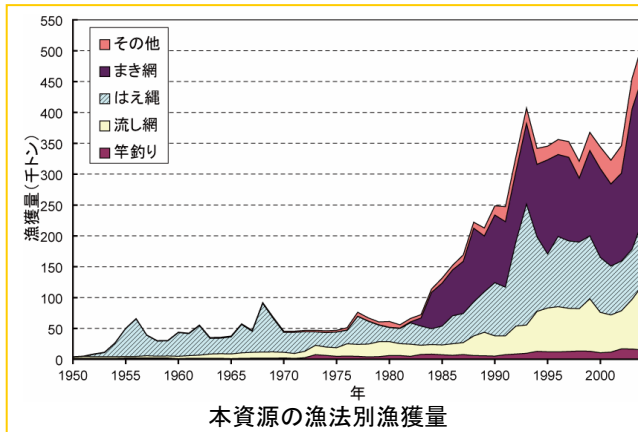
刺身や缶詰原料



最近の資源評価で使用されたキハダの 2 種類の成長式 (2005 年の IOTC 第 7 回熱帯まぐろ作業部会レポートより)

漁業の特徴

インド洋におけるキハダの大半は南緯 10 度以北およびモザンビーク海峡付近で漁獲されている。台湾、インドネシア、日本を中心としたはえ縄（過去 5 年間では 22%）およびスペイン、フランスを中心とするまき網（過去 5 年間では 45%）による漁獲が大きいものの、キハダの総漁獲量の 3 分の 1 程度が小規模な地域漁業（流し網や竿釣りなど）で漁獲されることが、インド洋におけるキハダ漁業の特徴である。



漁獲の動向

本資源の総漁獲量はまき網漁業が本格的に開始する 1983 年までは、最大 9.2 万トンであり、大半ははえ縄による漁獲であった。まき網漁業開始後の 1984 年からは漁獲量は 10 万トンを超えて急増を続け、1993 年には最大の 40.7 万トンに達し、その後は 2002 年まで 30~35 万トンで推移している。2003~2004 年には、西インド洋熱帯域でまき網船とはえ縄船による大量漁獲が記録され、2004 年の総漁獲量は約 51 万トンに達した。2003~2004 年のこの急激な増加の原因は、環境条件の変化、加入量や漁獲努力量の増加、まき網船における全周ソナーの普及などによると考えられている。

資源状態

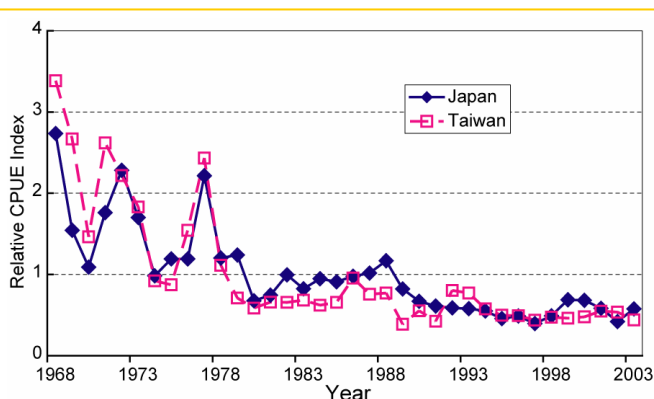
2005 年 7 月に開催された IOTC 第 7 回熱帯性まぐろ作業部会では、提案された 4 種類のモデル (ASPM, Bayesian two age-classes production model, PROCEAN, CATAGE) で資源評価を行った。いずれもデータ (不確実性) や方法 (仮定) に問題があり、最終的な合意に至らず、参考扱いの CATAGE を除いた 3 種類の解析結果を併記する形で落ち着いたが、1980 年代半ば以降増加している漁獲係数の経年変化の傾向は良く似ており、MSY は 30~35 万トン前後と推定された。これは 1999~2002 年の平均漁獲量 345,200 万トンとほぼ一致している。しかし、2003~2005 年にかけての大量漁獲 (45~51 万トン) を全て反映していないために注意が必要である。

資源評価まとめ

- 2005 年 7 月の IOTC 熱帯性まぐろ作業部会で資源評価が行われた
- 総漁獲量は MSY に近いかそれを超過

管理方策

2006 年 11 月の IOTC 第 9 回科学委員会の勧告は次のようになる。2003 年と 2004 年のキハダ大量漁獲の原因が、もし加入量の増加による資源量の一時的な増大ではなく、漁獲効率の上昇や漁獲努力量の増加であれば、資源への悪影響が考えられるので、今後資源状況の注意深いモニタリングが必要である。YPR 解析では、FADs 利用のまき網漁業で若齢魚への漁獲圧の上昇が今後も続けば、資源に悪影響があり、操業を減少させる必要がある。ただし、この漁業の主対象は (資源状況が健全な) カツオである点に留意する必要がある。2005 年の資源解析では、最近年の漁獲量は MSY に近いかそれを越していると考えられ、全漁業で 1999~2002 年水準の有効漁獲努力量と漁獲量を越えるべきでない。



日本と台湾のはえ縄漁業での本資源の標準化した相対 CPUE

資源管理方策まとめ

- 24m 以上の漁船数を 2003 年の IOTC 登録漁船数以上に増加させない (努力量の凍結)
- 1999~2002 年の平均有効漁獲努力量、漁獲量を越えるべきでない

キハダ (インド洋資源) の資源の現況 (要約表)

資源水準	中位
資源動向	横ばい
世界の漁獲量 (最近 5 年)	32.3~51.2 万トン 平均: 39.6 万トン
日本の漁獲量 (最近 5 年)	1.5~1.9 万トン 平均: 1.7 万トン